

## 佐渡裕PAC芸術監督によるメロマン室内管弦楽団の公開クリニック報告

日時：平成28年9月9日(金)19時～20時30分

文責 メロマン室内管弦楽団 コンサートマスター 萩森 学

曲目：ベートーヴェン 交響曲第8番へ長調 作品93 第一楽章

佐渡氏の指摘内容

- 音楽の方向性を大切に。冒頭4小節目に向かって進んでいく。イチ、ニイ、サン、イチ、ニイ、サンときちんと数えていくことはもちろん大事だが、それよりも音楽の方向性を打ち出すことが重要。
- 28～31小節。普通は弱拍の3拍目にsfが付いている。ベートーヴェン以前の常識に反抗しているところ。強調する方がよい。(ここでベートーヴェンとゲーテがオーストリアの皇后に出会った時のエピソードを紹介)
- 12～29小節までは2ndVnとVlaが16分音符を刻んでいる。この2パートはしっかりリズムを作る。(2ndVnとVlaでここを弾かされた)他のパートはこの刻みに嵌めていく。特にVc,CBは、13小節、15小節、17小節の1拍目の裏の食い付きが遅れている。
- 管打楽器は13小節、15小節、17小節の3拍目の裏の16分音符を厳しく。現状はおっとりしている。
- 19小節の3つの八分音符は音楽を決めるところ。エレガントにしないで力強く弾く。
- 34小節、35小節の四分音符はスタカートが付いているので、短く。36小節の1拍目は長めに。
- 37～39小節。3拍目の頭のスタカートをはっきりと出し、3拍目の裏の八分音符をはっきり区別する。(45小節からのFl,Ob,Fg、242小節からのOb,Cl,Fgも同様)
- 41小節2拍目からのAの音は歌う。
- 52小節。初めてのpp。大事件。ppで。
- 58小節からのcresc.は2ndVnとVlaで仕掛けていく。このcresc.は中途半端ではなく、しっかりとcresc.する。
- 73小節からは歌う。特に2ndVn。83小節からも同じ。
- 106小節、118小節、130小節の2ndVnから始まる音は印象的な音で。
- 106～111小節まではpを保持。112小節で突然ff。コントラストをはっきりと付ける。
- 108小節からのFg,Cl,Ob,Flが順に出てくる部分は、全体でdecresc.になるように演奏する。また、Vla,Vc,CBの八分音符のテンポ感をしっかりつかみ、テンポを絶対に緩めず、正確に吹く。(120小節から、132小節からも同様)
- 143(C)～182小節までは2拍目にsfが付いている。ここは、攻撃的な音楽である。
- 168～179小節までは4小節単位で段々盛り上げていき180小節に至るようにしたい。そこで168小節の2拍目から一旦少し弱くし段々強くしていくのが効果的である。
- 182小節、184小節の1拍目のTimpは、オーケストラ全体を引き締めるためにも迷い

のないのタイミングで演奏する。この箇所は、指揮者よりも **Timp** の方が重要。

- 305 小節の **Vn,Vla** は、その前が **p** で、ここから確実に **pp** にする。
- 308 小節からのタタタタンという上行音型は正確に。
- 308～316 小節までは **sempre pianissimo** を維持し大きくならない。317 小節 (**1stVn** は 318 小節) からしっかり **cresc.**する。
- 333 小節から 4 小節間は美しく歌う。
- 333～340 小節の二分音符と四分音符のパート (**2ndVn、Vc,Fg,Cl**) は、浮き出てくるように演奏。
- 354 小節、358 小節、360 小節の八分音符の 3 拍は前のめりにならない。
- 372 小節(最後から 2 小節目)はテンポで(遅くしない)。

最後に 1 楽章を通した。

以上